

平成24年度学内版 GP 成果報告書

取組名	大学初年次教育を中心とした基礎学力と専門知育成プログラム
実施組織	教育学部
実施責任者	西一夫(教育学部)
取組の目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 複数の「新入生ゼミナール」が独自性を保持しつつ連携をはかる。 2. 大学人としての基礎学力と専門知の涵養を目指す。 3. 上級学生の参与によって専門知に対する学びの質保証と基礎学力向上をはかる。 4. 授業カリキュラムの体系化をおこない、教育学部における初年次教育科目としてのスタンダードカリキュラム構築をおこなう。
<p>1. 目標達成のために行った活動と成果 (箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生に問題を投げかけ考えさせる課題内容の具体的提示と活動の実現 →創造的な課題解決方法の模索と実践、課題解決学習の学びを体感 2. グループワークを通じたコラボレーション能力、コミュニケーション能力を高める方法の提示 →集団での討論・意見集約の難しさを実感し、方法論の獲得 3. 学生自身で目標設定して振り返りをおこなう方法の提示 →授業開始時における自己目標の設定と単元毎のリフレクション実施と授業終了時の達成度を自己評価・相互評価（評価表を使用） 4. 受動的な学びから能動的な学びへの転換を促す方法の提示 →目標達成と集団社会の一員としての自覚を意識させる。参加型の学習形態の実現。読書レポートの継続的实施 5. 教員が学生の自律プロセスに関わる方策 →教員の書年次教育に対する認識と共通理解の形成 6. 継続的読書習慣の形成と批評活動 →読書ジャンルの拡大と相互読書と批評方法の獲得と実践 7. 上級学生の指導者意識の自覚 →指導者としての自覚形成と企画運営能力の育成 8. カリキュラム体系化にむけた他分野との情報交換 →学部内調整とカリキュラムと授業実践の蓄積
<p>2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望</p>	<p>本採択プログラムでは、初年次教育の重要性に鑑み、新入生の能動的学習活動の涵養と批評的学習活動の実践を中心に据えた。またその周辺には初年次教育に対する教員の認識と共通理解の形成、新入生に対する指導者的立場から支援方策を上級学生に獲得させることを位置づけた。さらにはカリキュラムの体系化に向けての情報交換と蓄積を周縁活動とした。</p> <p>その結果、以下のような結果と展望を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 課題解決型学習による仲間意識の形成、協働による学習活動の意味を実践的に修得できた。これは西長野キャンパスで実施した集中授業において、従来なかった、新入生自身による企画運営として応用的に活動結果を示すことができた。さらには毎週実施したブックレポートによって読書範囲の拡大と他者への紹介行為を通して、これまでの読書行為とは異なる視点からの読書習慣の端緒を作り出した。 2. 各自が授業での目標を設定し相互交流することによって協働的に

目標達成に向けた自覚的行動力の育成が可能となった。また、前期授業終了時には設定目標の達成度をそれぞれ個別で確認し評価すると同時に相互評価を実施することによって、各自の評価を深めることが出来た。

3. 新入生を育成する課程において上級学生の指導者的立場の自覚と指導者としての自覚を促すことができた。これは各分野での学生活動に波及効果があった。

4. 初年次教育に対する担当教員の認識を深め、カリキュラムとしての重要性について共通認識を持つことができた。これによってスタンダードの必要性を共有した。

5. 各分野で独自に実施するゼミナールに共通項目を盛り込む必然性を明確化し、評価尺度を設定して汎用性を持たせる必要があるだろう。また、学生の振り返りや話し合い活動を中心とする活動での評価項目の明確化、さらにはe-ALPSを活用した学習活動の評価観点を明確にするなどの課題を残した。

だが、松本と長野を様々な手段で教員のみならず上級学生をも新入生と積極的に関係づけたことは、25年度当初から学生人間形成を円滑におこなえている状況等から、本採択プログラムは各地学部でのカリキュラムに一定の有意義性を有するといえる。